

研究計画書

研究課題名

ミカファンギンに中等度耐性を示した、*Candida glabrata* による骨髄炎の1症例

研究等の概要と方法

【概要】

骨髄炎は病原微生物による血行性、あるいは局所の障害より生じた骨皮質から骨髄の一部あるいは全体に及ぶ感染であり、治療には長期の抗菌薬を必要とする。

骨髄炎の原因微生物の50%以上を *Staphylococcus aureus* やコアグラゼ陰性ブドウ球菌(CNS)が占めているのに対し、*Candida.spp* は5%以下とされ、真菌による骨髄炎は割合として少なく稀な疾患である。さらに、真菌性骨髄炎の *Candida.spp* の内訳として *Candida albicans* が62%、*Candida tropicalis* は19%、*Candida glabrata* は14%であり *Candida glabrata* は *Candida* の中でも割合は低い。

症例は81歳男性、前立腺生検時にCT検査で腸腰筋膿瘍が指摘された。椎体板洗浄と固定術施行時に提出した培養から *Candida glabrata* が検出された。*Candida glabrata* の多くはフルコナゾールに耐性である事が知られており、第一選択薬の1つとして推奨されているカンディン系薬剤での治療が開始された。

しかし、今回検出された株ではミカファンギン（以下 MCFG）に対する最小発育阻止濃度（MIC）が0.125と中等度耐性を示したため、アゾール系への治療変更を行う必要があった。*Candida glabrata* におけるカンディン系の耐性株は近年増加しているが、骨髄炎における *Candida glabrata* に対して MCFG 中等度耐性を示した報告はされていない。

真菌性骨髄炎の治療期間は一般的に2週間の静脈注射の後、内服変更して合計6～12ヶ月の長期投与が推奨されている。加えて、*Candida glabrata* はアゾール系に耐性や低感受性の場合が多く内服薬に変更する場合はアゾール系に感受性があることを確認し変更する事とされている。

また、当院では真菌に対する感受性試験を行う際は外部委託を行っている。早期から検出菌に対して感受性のある抗真菌薬を使用し、その後抗真菌薬を内服薬へ変更していく際の薬剤選択に、感受性試験の結果は必要であると考え。よって、この貴重な症例についての報告は院内に限らず感受性試験の必要性を示唆する有益な情報と考える。

【方法】

診療録などの過去の診療情報を用い、血液データ、細菌情報等を後方的に調査、検証を行う。

研究等の対象及び期間、実施場所

期間：2015年から2023年1月現在における治療経過

実施場所：電子カルテおよび調剤支援端末にアクセスできる院内端末

倫理審査申請の要点

- ・学会発表、論文での必須要件であるため
- ・過去の診療録及び調剤記録からデータを抽出する。
- ・氏名は含まない